

4. シビウ

GPS紛失

21日も好天が持続した。この日に向かう予定のシビウはブラショフ同様、ドイツからの移民によって築かれたトランシルバニア地方の代表都市で、ブラショフの西120キロほどの所に位置する。列車で移動しようと、インターネットで列車時刻を調べると、本数はそこそこあったけれど、利用したいと思ったのは12時44分発、シビウ到着3時25分の一列車だけだった。朝飯は抜きにして早めの昼食をブラショフで済ませることにする。

11時ちょっと前にチェックアウトする。2泊の料金は439.63lei(9,535円)で、朝食抜きを考えればルーマニアでは高めかもしれない。次いでタクシーを呼んで貰おうと思った。一昨日はぼられたが、これまでの経験からすると、どこの国でもホテルで呼んだタクシーから、おかしな料金を請求されたことはない。しかしタクシーが宿の前まで乗り入れられないし、タクシー会社を選べば、不当な料金にはならないと断られてしまった。

宿を出て徒歩3分で、一昨日は休業していたビストロ・デラルテに着く。幸い営業していたし、半端な時間のせいか、先客はカップルが一組食事しているだけだった。軽い食事にしたかったので、スパゲティ・カルボナーラとハウスワインの赤をグラスで貰う。

10分しないで運ばれてきたスパゲティはベーコン(パンチェッタ)の厚切りが沢山入ってスパゲティ・パンチェッタみたいだった。味の方は不味いと云うほどではないものの、何かピンボケで、粉チーズではなく細切りのチーズがかかっているのも今ひとつ面白くない。しかしワインのツマミと思えば不満はなく、ついでに書けば二十歳くらいのウェイトレスは快活で感じが良かった。朝食の料金はワイン2杯12lei(260円)、カルボナーラ22lei(477円)。

タクシー乗り場に移動した。宿が推奨するタクシー会社の名前はメールからメモホルダーに書き写しておいた。Martax, Bratax, Rotaxiだ。しかし長年日本のタクシー乗り場で、一番前に停まっている車に乗るのが習い性となっているから、それを破ろうとすると何か動きがぎくしゃくする。それでも頑張って3社のうちのどれだったかに乗車した。

今度は回り道などせず、ほぼ最短距離を辿っているのは判った。しかし駅に着いてみるとメーターは15lei(325円)になっていた。所詮は運転手が外国人をカモにしようとするれば、ルーマニア語を話せず、土地の習慣も良く判らない旅人はお手上げだ。金額が莫大ならば警察に駆け込むしかないだろうが、325円では何とも仕方ない。



上:ビストロ・デラルテの店内。下:スパゲティ・カルボナーラ拡大画像。

シビウまで149キロの2等急行指定券を42lei(911円)で購入し、プラットホーム番号を教える。コンコースの待合席は何か落ち着かないので、そのままホームへ移動した。

シナイア駅では、ホームが有蓋だったし、設備も比較的新しかったが、ブラショフ駅は対照的で到着列車の行き先表示装置もない(P.134参照)。定刻に切符売り場で聞いた番線に到着した列車だから、シビウ行きは間違いはないと思っても一抹の不安が残った。乗り込んでから確認のため訊いたジイサンは英語が通じなかったものの、「違う！」と断定する。一旦降りて別の人に確認して再乗車。不安はそのままに列車が動き出した。

同じ車輌にいた酔っ払いで切符を持たぬジイサンが、車掌に追いつかれ次の駅で下車する。この車掌は年配で小柄だが気合いの入った人だ。帽子に赤い帯、そして制服に赤い襷を掛けて多分何かエライ車掌らしい。この人に列車がシビウ行きで、乗っている車輌が二等車であることを確認してようやく気分的に落ち着いた。

車内はガラガラだったので指定座席を離れ、快適で撮影しやすいところを選ぶ。席に坐りしばらくしてカメラバッグに縫い付けたホルダーからGPSがなくなっていることに気付いた。ブラショフ駅プラットホームにでたときはあったのを確認している。盗まれたとすれば、ベンチで酒を飲んでいたらホームレス風オヤジなどが怪しいが、彼等がGPSを持っても仕方ないと思う。しかし落としたりしては落下防止用のコネクタから外されているのが不思議だ。

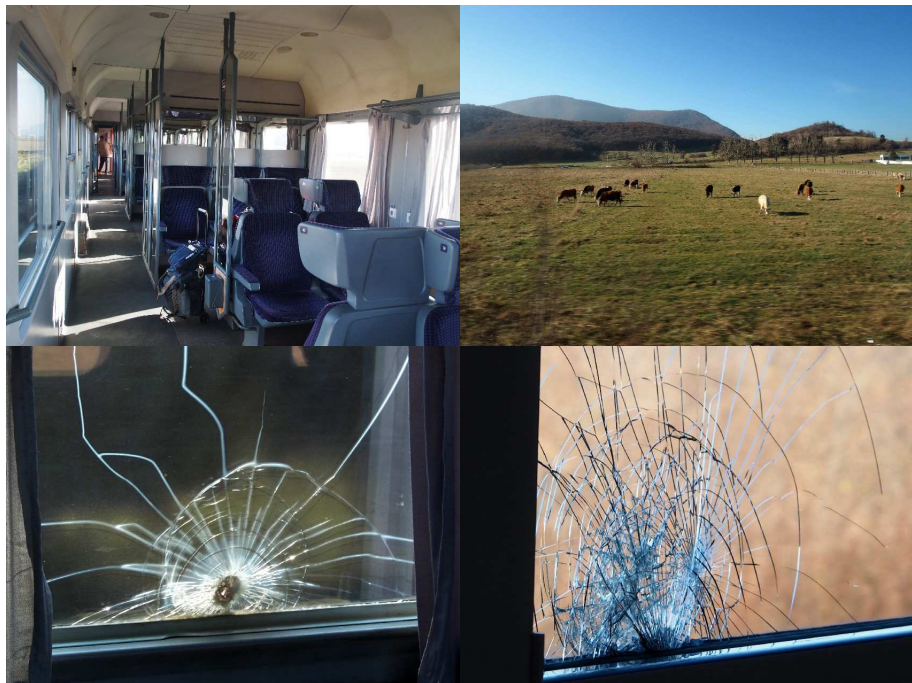
シビウ到着直前に、まだ列車が時速10キロぐらいで走っていると状態で、ドアを開けて外の状況を見るオヤジがいた。プラットホームと反対側であることを確認し、停車すると同時に飛び出していった。乗り継ぎでも急いでいたのか、乱暴なことをする人だ。

ルーマニアのタクシーは安いけれど、ブラショフで二回ぼられ、損害は取るに足りないものでも、カモにされたのが不愉快だ。そんなことで駅から宿までの約1.5キロは歩くつもりでいた。幸い雨なども降っていない。

問題は駅前からどちらへ踏み出すべきかで、駅は日英両ガイドの地図範囲外だった。道を尋ねるべく辺りを見回すと、キャリーバッグを引っ張った若い女性二人が通りかかった。



ブラショフ駅舎は小鳥が自由に入出入りしている。



上左:2等車の車内。上右:車窓風景。下:窓ガラスのひび割れを複数箇所で見ると、特に左のものは弾痕のようで物騒だ。



何となく英語が通じそうなので、先ず判りやすい目標のマーレ広場はどちらなのか訊いた。質問は通じたものの流暢な英語で、「旅行者なので判らない。」とのことだった。ともかく礼を述べると、彼女たちは二人で話ながら数歩行き立ち止まり、振り返って、「マーレ広場へ私達はタクシー行けど、一緒に行きますか？」との、意外なそして

願ってもない提案だ。躊躇することなくこの好意に甘える。

運転手の言葉を彼女たちが通訳してくれた。それによれば車なので遠回りになるけれど、ともかく広場への最短距離というところで停車する。タクシー代は全額負担するつもりでいたのに、逆に彼女たちはいらぬという。6レフしか払わなかったというのを、ともかく5レフ受け取って貰った。

顔立ちが似ていたから姉妹なのかもしれない。楚々とした美人達なので、撮影したかったけれど、お礼を云って、料金の幾分かを受け取って貰うので精一杯だった。ローマ皇帝ホテルに泊まるという彼女たちが立ち去るのを見送り、さて私の宿はと住所を確認すると、なんと20メートルも離れていないところだ。

ブラショフのカサ・アルバートは、古い集合住宅を改装しオーナーの趣味を色濃く反映した宿だったが、同じカサが着いても、フリーダは昔からの旅籠のようだった。1階部分には大衆食堂と、中庭に通じるアーチ型の通路があり、この通路の入口付近に間口半間ほどのキオスクを小さくしたような売店がある。タバコやスナック類、ミネラルウォーターなどを売り、宿泊者に対するフロント業務も行ってた。

予約はすぐ確認されたので部屋を下見させて貰う。対応してくれた女の子は、小キオスクから出るとドアに施錠し、先に立って通路を奥へ向かう。中庭の中央から2階への外階段があり、テラス状の通路へ上がり、奥の方にある2号室が提供された部屋だった。

テラス通路に面して窓があるだけで、残りの三方向は壁だけだ。隣接する建物と外壁を接しているのだろう。そんなところに無理矢理窓を作るより、この部屋みたいにしたい方が落ち着く。部屋は広々し内装は明るい色使いだが品の良いものだ。中型冷蔵庫が置かれ、40インチぐらいの液晶テレビがあるのはルーマニアとしては珍しい。小テーブルと椅子2脚があるのは晩酌をやるときに有り難いし、浴室の設備も新しかった。

満足してチェックイン手続きをする。このフロントは無になることもあるらしいので、勘定も済ませてしまった。2泊朝食付きで260lei (5,639円)は安い。カードで支払いを済ますと、朝食券を2枚くれた。名前、部屋番号、日付けなどが記載され、1階の大衆食堂で朝食を摂ることができる。



上: カサ・フリーダの外観。手前に見えるのは寒冷期用にビニールで囲ったテラス席。下: 泊まった部屋。

シビウ黄昏散策

既に時刻は4時を回っていたのでこの日の食事はブラショフで摂った早めの昼食で良しとする。しかし晩酌開始にはまだ早いので散策がてら街を歩くことにした。

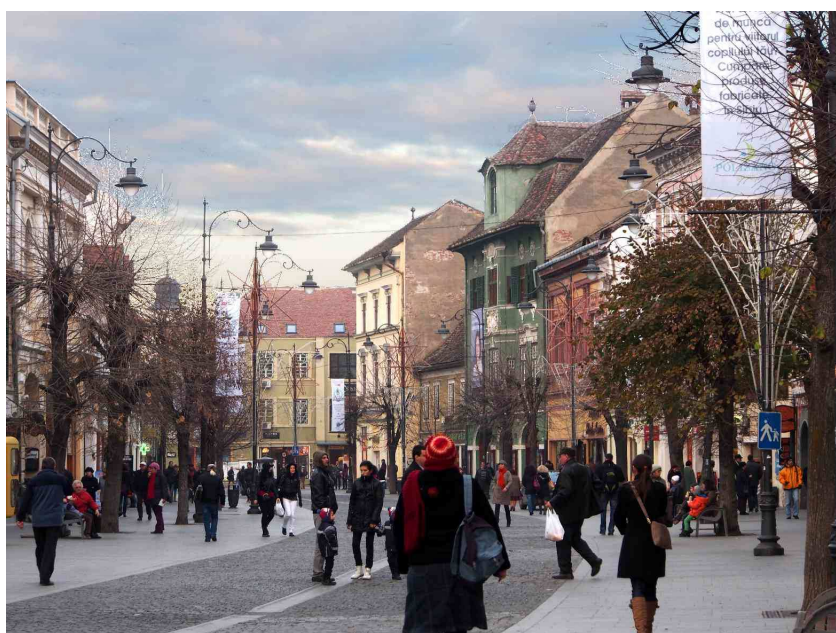
宿の面しているニコラエ・バルチェスク通りを北北東にあるマーレ広場へ向かった。ちなみにこの通りは街で一番の繁華な通りで、ニコラエ・バルチェスクは1848年の革命にかかわった国民的英雄らしい。

沿道は商店が多く、次いで飲食店が目立ち、銀行、オフィスなども点在する。商店は大部分が間口も広く高級感が漂うところが多く、みすぼらしかったりバツタ屋のような猥雑さを見せるところはない。

3分ほど行くと左手にローマ皇帝ホテル(Imparatul Romanilor: インパトゥル・ロマニロル)がある。先ほどの姉妹は此処に泊まっているのかと思いながらしげしげと眺めた。日ガイドによると1555年にレストランとして開業し、その後高級ホテルになり、王侯貴族などにも利用されたい。現在の内装は1895年の大改装によるものが主であるとは魅力的なところだ。執筆にあたりBooking.comで2013年11月の1泊料金を調べたところ、

200.12lei(4,340円)と、それほど高くない。ホテルのグレードとしては三つ星なのだが、紹介画像にはジムや室内プールなどもあり、結構豪華だ。それでもこの値段なのは、やはりルーマニアの物価が安いと云うことだろう。

ホテルから100メートルほどでマーレ(Mare: 大)広場がある。広場の七割ほどはクリスマス期間用の屋台で占められていたが、開店しているところはまだなかった。



ニコラエ・バルチェスク通り。4時12分。



この街でよく見かける屋根の煙抜き窓。人の目、それも薄目を連想させる。



ニコラエ・バルチェスク通りには格調高い建物と、それに見合ったような店舗がある。



福音教会裏手の階段通路。



山羊のミルク。メーカーはドイツの会社らしい。

間にカソリック教会を挟み、マーレ広場とは対になったようなミカ (Mică: 小) 広場へ足を延ばす。しかしこの広場は形が崩れてまとまりがないし、半分くらいは駐車場として使われていた。そんなことで、一応一廻りしただけでマーレ広場へ戻る。

夕景でも撮れないかの期待はあったが、次第に雲が増えどんよりとして一部がくすんだ茜色になっただけだ。それでも数枚撮影してみたものの、期待通りの駄目画像だった。5時近くなったので、再びニコラエ・バルチェスク通りを宿へ向かう。

途中でスーパーマーケットが目に入り、特に欲しいものもないまま一応品揃えを見物に入ってみた。乳製品売場で山羊のミルクを見つけて、「これは試さねば。」と、1リットル箱を手に取り、ついでにヨーグルトも買うことにした。ヨーグルト125g 4箇 7.16lei(155円)、山羊乳17.19lei(373円)。後は真っ直ぐ宿へ帰る。



朝食のオムレツ。

城壁、三位一体首都大司教大聖堂、評議会塔

22日も澄み渡った青空の広がる朝を迎えた。8時半に朝食のために下へ降りた。一旦バルチェスク通りへ出てから食堂へ入る。椅子テーブルの感じは大衆食堂だが、ウェイター達の感じは良い。テーブルに置かれた朝食お品書きからオムレツを注文し、飲み物はカプチーノとオレンジジュースにした。

朝食は早めに済ましたが、出かけたのは10時近かった。出掛けに二階から中庭撮影のアングルを探していたら、肥満が目立つ掃除のオバサン

が、わざわざ掃除途中だった客室の窓を開けて、此处から撮ればいいという身振りをする。親切で気さくな人だが、彼女を見かけると必ず何か食べている。リンゴだったりたっぷりソースを載せたパンなどで、これでは太るわけだ。

バルチェスク通りへ出てマーレ広場の方へ向かう。沿道の建物を改めてじっくり見ると、築100年程度のものに風格が感じられる。この街もブクレシュティ同様、20世紀初頭頃に黄金時代を迎えたかと思われる。

昨日、買い物をしたスーパーマーケットBILLAの開店時間を改めて見直した。ハンガリーと異なり日曜日にも営業するようだ。

スーパーマーケットBILLAのショーウィンドウに貼られたステッカー。別の場所にあったものを合成。上: 絵文字の通り。下: 月～土7:00-22:00 日8:00-22:00。



アレクサンドラ・パピリヤーン通りにある食堂クラマ・シビウル・ヴェキの看板。

スーパーのある角を左折し、アレクサンドラ・パピリヤーン通りを城壁の方へ向かう。途中に英ガイド推奨の食堂クラマ・シビウル・ヴェキ(シビウの古いワイン倉)があった。まだ時刻が早いので、店を覗くことはできなかったが、

かなり凝った作りの看板は期待を抱かせるに十分なものだった。

食堂から100メートル弱で城壁遺跡にぶつかる。この付近の200メートルほどが辛うじて城壁と判る形で目視できる。ギルドにより建設された三つの塔があり、一番西南西に位置するのが鉄砲鍛冶タワーで、次が陶工タワー、大工タワーと続く。鉄砲鍛冶タワーと陶工タワー間の城壁は既がないが、陶工タワーと大工タワー間は(多分修復により)ほぼ完全な状態で壁が残っていた。

城壁の外側で往時は空堀でもあったと想定される地帯は幅50メートルほどの公園として整備され遊歩道が設けられている。その外側が旧市街を取り巻く環状道路で、昨日タクシーで通過したことを思い出す。

公園の中で野良犬に会った。ブラショフでは見かけなかったが、シナイアにもいたし、ルーマニアはブルガリア同様、野犬の多い国ようだ。2006年1月にはブクレシュティで在住の日本人が野犬に噛まれて失血死する事故があったそうだ。

しかしこれまで見る限りでは凶暴そうな犬はいない。しかし冷淡というか、人間に媚びることもせず、呼んでも知らん顔で通り過ぎる。ちなみに耳に付けられたICタグは、狂犬病予防注射済みを意味するとの情報もあるが、未確認だ。

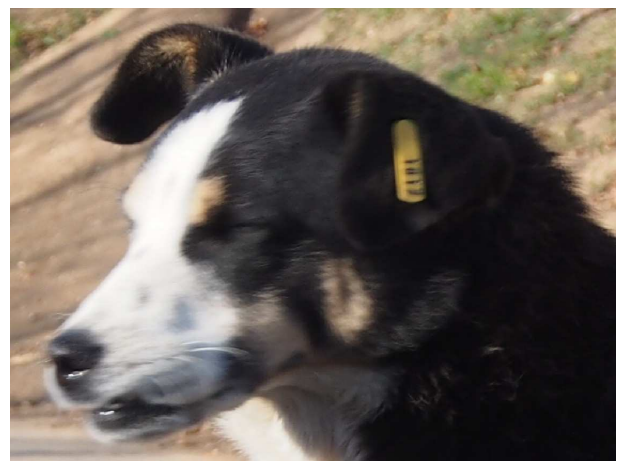
気温は4.4℃だったが無風と陽射しのお陰かアウトドア用カッターシャツとコートで寒さを感じない。城壁近辺の観察と散策を終え、マーレ広場の方へ向かう。



城壁の一部であり、16世紀に築造された陶工タワー(Turnul Olarilor)。他の塔にも、鉄砲鍛冶タワーや大工タワーなどがある。



陶工タワーと大工タワーへと続く城壁。



城壁のそばで見かけた野犬。ブルガリア同様耳にタグが着けられている。



ホームレスの家財道具一式か、はたまた気合いの入った長距離自転車旅行者のものか良く判らなかった。画像左下に辛うじて写っているのはシェパード系の大型犬。



シビウ市役所(左)とカソリック大聖堂の鐘楼。



評議会塔を抜ける二広場連結通路からミカ広場越しに見る福音教会の鐘楼。

めとする貴族の邸宅があり、今でも家々の規模は比較的大きいし、商店街も垢抜けている。これに対し下町は何かしら猥雑な雰囲気と、活気に溢れている。

マーレ広場は他の街の中心広場、例えばブラショフのスファトゥルイ広場などに比べると魅力に乏しい。面積としては大きいのに、広場を囲む建物に魅力的なものが少なく、2階建てくらいの低層な建物が比較的多いことも求心力を弱めているのだろう。そんな中で一番目を惹くのは市庁舎だった。

もとは農業銀行だったらしい。様式的にはネオバロックと思われるので、やはりこの建物も20世紀初頭頃のルーマニア黄金時代の産物だろう。昨日も撮影したが、露光不足もありぱっとしない画像だった。やはり澄んだ青空を背景に燦々と日を浴びる状態だと撮影も楽だ。

広場を取り巻く建物で、一番重要なのはブルッケンタール博物館だろう。市庁舎のちょっと南側に位置する。しかし此処を訪ねるのはもう少し後のことだ。

評議会塔下の連結通路でミカ広場を抜け、広場の北東角から階段歩道を下って、金細工職人広場 (Piața Aurarilor) へ出た。ちなみにシビウ旧市街は下町 (Orasul de Jos) と上町 (Orasul de Sus) から成り立っていて、ミカ広場や福音教会が上町のエッジに位置している。

金細工職人広場から100メートル弱北へ進むと、下町を東西に貫く5月9日通りにぶつかった。ちなみに5月9日は1877年にルーマニアがオスマン帝国からの独立を宣言した日らしい。

下町、上町はある程度、日本の下町、山の手に相当するようだ。かつての上町にはブルッケンタール邸を始



カーサ・ハインリッヒ・リーガー。由緒がある建物らしく、インターネットでルーマニア語のページが幾つか見付かった。しかし内容を理解することができない。

ルーマニア語

シビウの街を歩いていると、商店の看板やショーウィンドウに貼り出された掲示などを見て、かなりの部分を理解できることに驚いた。キリル文字が使われていないことが大きいけれど、使用されているルーマニア語がどんなものか調べてみた。

系統的にはラテン語の東部地域における方言。18世紀に行なわれた“浄化”運動により、アルファベットをキリル文字からラテン文字に改めた。またスラヴ語やギリシア語、トルコ語などの影響をラテン語、フランス語、イタリア語などからの借用により排除する再ロマンス語化が行なわれ、今日のルーマニア語が形成されたらしい。

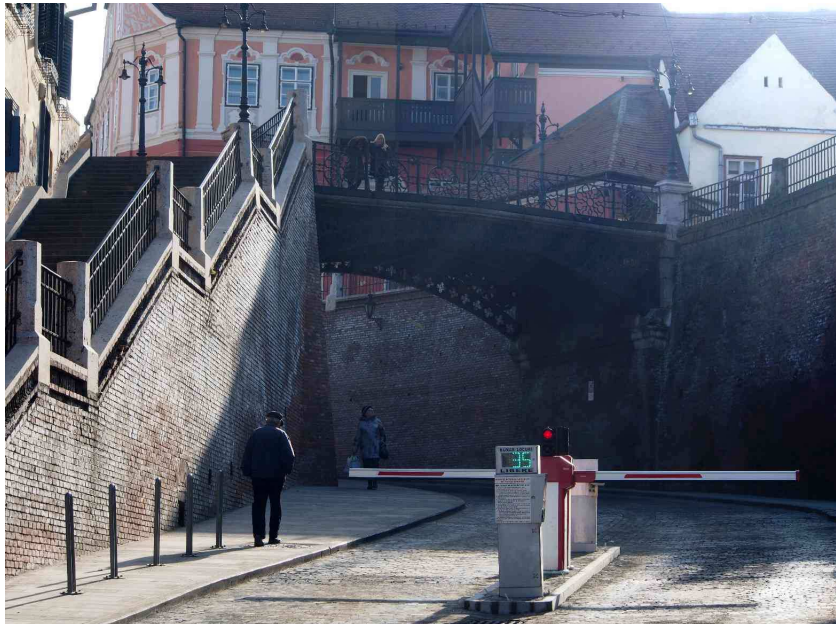
しかし感覚的な比較で言えば、イタリアの商店街を歩いているときより、理解度が高いような気がする。ひょっとすると英語使用の比率が高いのかもしれない。

西へ向かい最初の交差点を左折すると、ミカ広場から福音教会裏手へ通じる鉄橋が見えてきた。ルーマニア最古というこの橋を見上げるように数枚撮影し、再び5月9日通りの西進を続けた。

しかし石畳の街路を2分も歩くと場末と云おうか、家並みは続くもののザクセンらしさといったものは希薄になり、それに変わるような魅力もない。左手に福音教会の鐘楼が見えたので、それを目指して方向転換する。突き当たりが階段で、登ってみると昨日下町を撮影したところだった(P.147下参照)。こんな風に既知の領域と結びついて領分が広がる感覚が好きなのだけれど、さらに領域を拓げるべく階段を再び下り、右へカーブしながら南へ向かう末踏で石畳の坂道を辿った。

階段から何メートルも離れないところで宙吊りにされた金色の樽が目を惹いた。看板を出している店は、煉瓦造りでそれも日本で見かけるちょっとした化粧煉瓦ではなく、数十センチの厚さがある堂々たるものだ。Restaurant と butoiul de aur の文字と看板から、「食堂黄金の樽」かなと思う。名前はともかく、見たところかなりの老舗だし、福音教会のすぐ下といった立地も魅力的だ。英ガイド推奨の食堂クラマ・シビウル・ヴェキ(P.149参照)にも食指が動いたが、英ガイド推奨の店ばかりというのも、自力で良いところを探し出す嗅覚を鈍らせることになる。12時ちょっと前だったので時分どきとも云えるが、昼食を摂れば必然的にワインを飲むことになる。その前にもう少し街を見物することにした。

ミトロポリエイ通りにある三位一体首都大司教大聖堂(正教)に向かった。ブラショフと同様にルーマニア人の地位が低かったこの街で、正教会が司教座としてできたのは1904年のことだ。



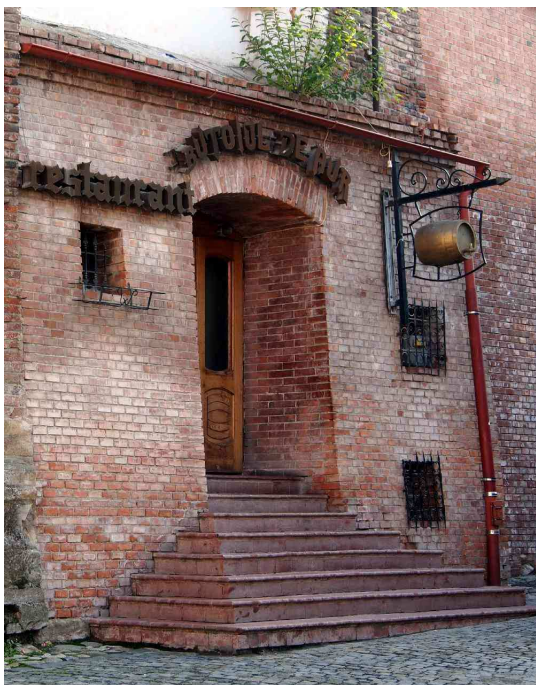
下町からミカ広場へ通じる切り通し。上に架かる鉄橋はルーマニアで最古の鉄橋で、1859年架設。通称、「嘘つき橋」。



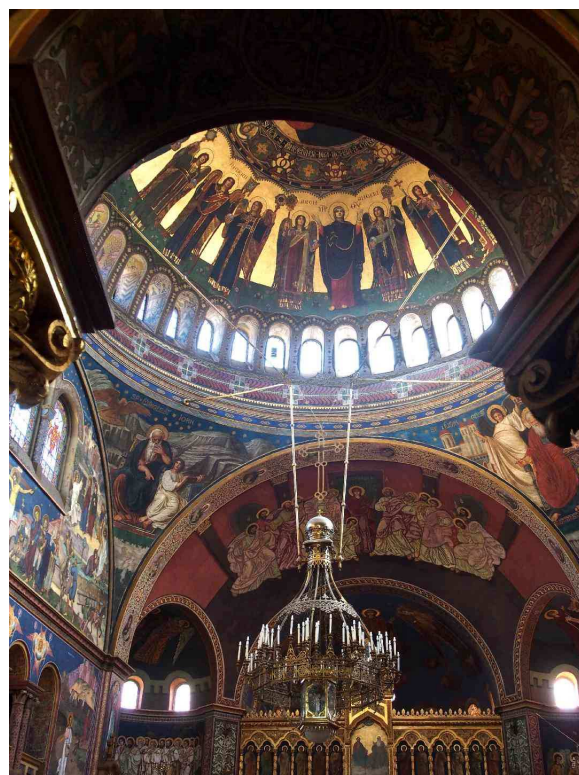
5月9日通りから見る福音教会の鐘楼。ランドマークとして好都合だった。



veterinară: 獣医。ルーマニアには動物専門の薬局がある。上の画像は看板、右は入口のガラスドア。



食堂黄金の樽。



三位一体首都大司教大聖堂。

大ドームのバントクラトル。

首都通り(多分大聖堂に因む命名)を南西に辿り、黄金の樽から5分ほどで三位一体首都大司教大聖堂に着いた。街の中心部に建てられなかったのはブラショフの聖ニコラエ教会と同じかと思うが、建設が始まった時点で中心部に敷地を確保するのは不可能だったろう。

建築様式としては正教会らしくビザンチン様式が主で、一部バロックということらしい。鉄筋コンクリートが使用されているため窓の面積が大きく、ドームを始め外壁に設けられた窓からの光で、堂宇内は輝いていた。

シビウに置ける主要三教会の中では、此処が一番見物に値するようだ。カトリック教会はおよそそれらしからぬ素っ気なさだったし、福音教会は工事のため内部に入ることさえできなかったが、ブラショフの黒の教会と同様にプロテスタントゆえに簡素なものだろう。

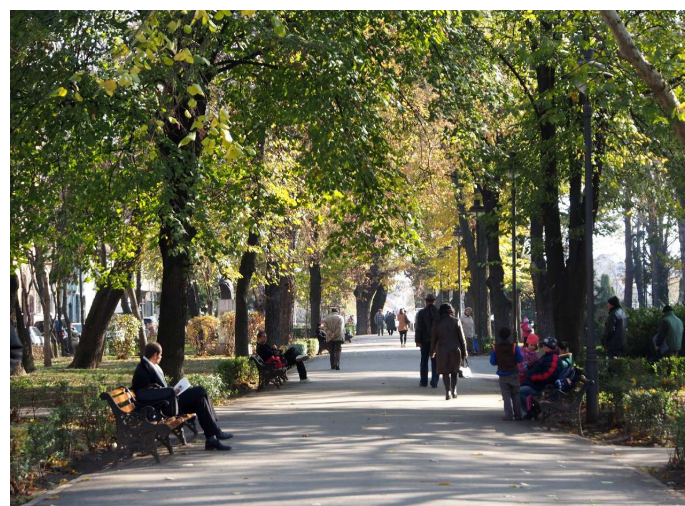
それに較べてこの大聖堂は、3段の階層を持つイコノスタシスも豪華精緻なものだし、それ以上に壁面を埋め尽くす壁画も素晴らしい。そして見上げた天井の大ドームに描かれたバントクラトル(全能者)とそれを囲む(良く判らないが)聖母や大天使達が圧巻だった。ちなみに肉眼で見るときには判らなかったことだけれど、撮影した画像を拡大して見ると、金色に輝く背景はモザイクのようだ。

大聖堂を出て、首都通りをさらに南西へ行く。100メートルほどで樹木の繁る帯状の公園がある。此処にもかつて城壁があり、その外側に設けられた空濠跡かと想像する。

一角に十数人が群がっているところがあった。人混みは嫌いだが、雰囲気のがんびりしているようなので、野次馬根性を起こし近付いてみる。チェス盤とそれを囲む椅子が設えてあり、二組ほどが対戦中で後はそれを見物するオヤジ達だ。



三位一体首都大司教大聖堂外観。



上: 空濠跡地を利用したかと想像される公園。下: 常設チェス盤。

将棋と異なりチェスは女性の愛好者も多いと聞かすが、少なくともこの屋外チェス場には一人の女性もいなかった。ついでに疑問に思ったのは、盤は固定だが駒は持参するのだろうか。

閑話休題。公園を南東へ進むと200メートルほどで終わり駐車場になる。昨日タクシーを下車したところだ。あの姉妹に同乗させて貰ってから20時間ほどしか経過していないのに、随分以前のことだったような気がする。

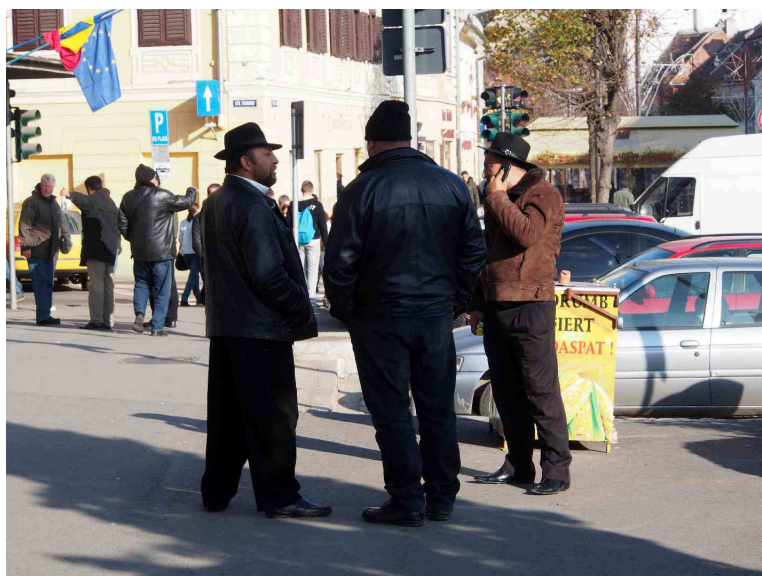
時刻は12時半近かった。一応街を一巡したので、ブルッケンタール博物館と評議会塔の見物は午後に廻し、昼食を摂るべく食堂金の樽へ向かった。宿の前を素通りし、ニコラエ・バルチェスク通りを途中から左折して裏通りの小径を辿る。思い通りミトロポリエイ通りにでられたので、幾分また己の領分が広がったような気分になる。

店に着いたのは1時15分だった。まだ時分どきだと思っていたが、先客は一人もおらず、ウェイター二人が手持ちぶさたそうにしている。二部屋ありどちらでも良いとのことで奥の方へ進んだ。突き当たりの壁にはマントルピースが設えてあるが、薪は燃えていなかった。

ルーマニア、独、英語併記のお品書きから、チョルバ・デ・ブルタ(ciorbă de burta:牛の胃袋スープ)と、メインとしてタルタルステーキを選び、ハウスワインの赤をグラスで貰う。タルタルステーキなどを食するのは、おそらく30年ぐらい前にスペインで経験して以来だと思う。なぜそんなものを食べたくなったのか、気まぐれと云えばそれまでだが、今となっては良く判らない選択だ。

ワインはすぐに運ばれてきたが、ウェイターはそのまま前室のテーブルに着き、店のスタッフ3人で昼食を摂り始めた。客がいるとき客席でスタッフが食事するなど、日本では考えられないことだが、こちらでは普通なのだろうか。エステルゴムのミュージアムガーデンで、ウェイターが仲間とカードゲームを始めたときも感じたことだが、日本人感覚では何かないがしろにされているようで不愉快だ。

スープは10分ほどして運ばれてきた。チョルバ・デ・ブルタはブクレシュティのラ・ママ(P. 122参照)でも食べていたが、まるで感じの違うものだった。要するにチョルバで酸味のスープが規定され、ブルタが具材を意味するが、それ以上の料理法や味付けなどは縛られないようだ。ともかくこれはさっぱりした味付けの仕上がりで、ブクレシュティのものより好みに合った。



昨日タクシーを降りた辺り。向かい合う3人はロマと思われる。



食堂金の樽。向こうの部屋で店のスタッフ3人が昼飯を食べている。



チョルバ・デ・ブルタ。少し汁気を減らしてから撮影



タルタルステーキ。

タルタルステーキはスープから17分遅れで登場した。ハイツ社とフォックス社(ドイツ)のウースターソース200cc壺とトースト、バターの切片が一緒に並ぶ。まずは撮影した。

落ち着いたところで一口食べてみて、冴えないものだと思う。タルタルステーキが本来こんなものなのか、はたまたこの店の調理が拙いのか判定できないが、多分後者だと思う。それでも酒のツマミになれば良いのだから、後は気にせず食べ進めた。

ワインを1杯追加し、入店から1時間ほどで最後にカプチーノを飲み食事を終える。勘定はチョルバ8.8lei(191円)、タルタルステーキ29lei(629円)、パン2lei(43円)、バター1.2lei(26円)、ワイン300cc2杯9.6lei(208円)、カプチーノ4.5lei(98円)。

何となく、「今日の昼飯は外れだった。」



評議会塔最上階の展望室から見るミカ広場と福音教会(西北西方向)。

..」と思いながら店を出る。時刻は2時半近くだったので、そのまま街見物を続ける。階段を登り、マーレ広場を横切って、評議会塔へ向かった。最上階の展望室から市街を一望するためだ。

ミカ広場側に入口があり、すぐに急な階段で2階へ行くと、そこが切符売り場だった。2lei(43円)の入場料を支払い、狭い螺旋階段を登って7階の展望室へ行く。

眺望は期待を裏切らず素晴らしかったものの、残念だったのは既に日が傾き始め、撮影には逆光になったり、光が上手く廻らず、部分的に暗くつぶれた画像しか撮れなかったことと、窓ガラスが汚れていたため、画像にもそれが出たことなどだ。

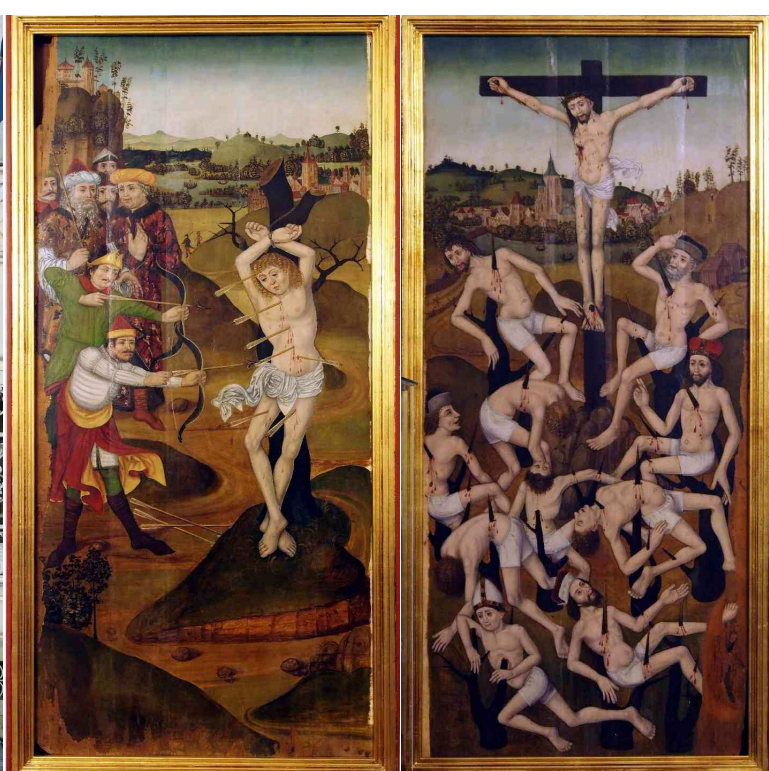
古い塔が地震により破壊されたのち、1588年に建設されたこの塔はかつての市長公邸で、その後は穀物倉庫、火の見櫓、留置場などとして使用されたい。



最上階の展望。上:南西方向。下:南東方向。せ



ブルッケンタール博物館入り口。



聖セバスチアンの殉教(1500年頃)。 キリストと一万殉教者(1517年)。

トランシルバニア公国がハプスブルクに実質的支配されていた頃、総督を務めたブルッケンタールはミーレ広場に面して総督公邸と私邸を兼ねた宮殿を建てた。後期バロック様式で1785年に完成した宮殿には彼の収集するルーマニアとヨーロッパの美術品、16世紀から18世紀の宗教的な彫刻やイコン、切手やコインなどが収蔵された。彼の死後1817年から一般に公開され、ルーマニアでは最古の、そして多分最良の博物館として今に至っている。

宮殿に入ると、すぐの左側が切符売り場だった。ルーマニア美術展と、ヨーロッパ美術展に別れて入場券が発売されていたので、「ヨーロッパの辺境でヨーロッパ美術を見ても仕方あるまい。」と考へ12lei(260円)の入場券、それと別途に撮影料120lei(2,603円)を支払う。

しかしいざ展示品を見ると、興味を惹かれるものがさっぱりないばかりか、作品数も僅かなものだった。どうやらこちらは企画展で、それもあまり注力していないものようだ。男爵の収集品をベースにしたこの博物館の至宝は常設展の方らしい。料金も20lei(434円)と倍近いのはそんなことによるのだろう。

1階の切符売り場へ引き返し、撮影料が引き続き有効であることを確認した上でヨーロッパ美術

展の切符を買う。ところが二階で入場チェックをしているオバサンは、「撮影は駄目！」というので、思わず、「いま下の売場で撮影可能と確認してきたばかりなのにどうしたことだ。」と反発した。それほどではないつもりだったが、余程悲憤慷慨しているように見えたらしく、オバサンは平謝り。反ってこちらが恐縮した。

常設展、企画展は私の憶測に過ぎないが、こちらの方が充実しているのは素人目にも明らかだった。その中でも16世紀ぐらいの絵画が、なぜか好みに合い、余人がいなかったこともありじっくり眺める。



トランシルバニア工房製作三連祭壇画(1500年頃。)



ブリューゲル、「長老」。博物館で自ら撮影もしたが、インターネット画像の方が綺麗なものを採用。

40分ほどを絵画鑑賞に費やし、そのくらいで十分な気分になった。博物館の収蔵品としては絵画以外にも多種多様なものがあり、例えばブルッケンタール家が使用していた銀の食器セットなども陳列されている。しかしそんなものを見てもちっとも面白くないし、そもそも博物館の類は好みではないから、絵画だけで堪能し博物館を退去した。。

一旦宿へ戻り、夕方スーパーマーケットへ買い物に行く。ミネラルウォーター2ℓ 2.49lei(54円)、ロールパン0.99lei(21円)、ウオッカ55.99lei(1,214円)。真っ直ぐ帰って晩酌を開始。宿に他の宿泊者はいないようで、1階食堂の喧噪が密やかに伝わってくる以外はひたすら静かだった。

夜中に目を覚ますとかなり室温が上がっている。温度計で確認すると25℃以上あったので、一旦スチーム暖房を切る。6時に目覚めたときでも23℃だった。窓のない部屋だから断熱性能が高いのだろうか。